

天長山國清萬年禪寺

臨濟宗圓覺寺派

國清寺

所在地

静岡県伊豆の国市奈古谷二四〇一



三つしやうじほんどう くり しょうろう
杉小立ちの中の國清寺本堂・庫裡・鐘樓



こくしょうじ じっさつ 國清寺創建から関東十刹への道

伊豆の国市奈古谷の國清寺は觀世音菩薩を本尊とし、山号を天長山と称する臨濟宗圓覺寺派の寺である。康安元年（1361）、室町幕府の有力者であった畠山國清は、関東管領にそむき鎌倉から伊豆に居を移し、翌康安2年春、奈古谷に一寺を建てこれを國清寺と呼んだ。

應安元年（1368）、上杉憲顯（1306～1368・関東管領）が國清寺を大いに修築して大きな寺にした。これにより、生い茂る杉の木立ちに囲まれた國清寺の殿堂は、ひときわ莊嚴さを増し、室町三代將軍足利義満の時に関東十刹の一に加えられ、「天長山國清萬年禪寺」と号せられる大きな寺院となった。

國清寺文書に見る國清寺盛衰の姿

大永8年（1528）の國清寺文書・「天長山國清萬年禪寺諸塔頭目録」には、國清寺は曆應年間（1338～42）に開創し、貞治年間（1362～68）に隆盛をきわめ、明應年間（1492～1501）になって廢絶した。この間約200年、堂塔は、時代を経て莊嚴さを増して光り輝き、境内の樹木も鬱蒼として、歴史を物語るかのように壯觀であった。伽藍は、中国の天臺山國清寺にならって、ほぼこれに準ずるものであった。また、鎌倉時代の名門、畠山を襲名した平國清が奈古谷に一字を建てこれを國清寺と名付けたなどの一文もあり、これが國清寺の創建・発展・隆盛・衰退などの姿を今に伝えている。

さらに、北條高時（1303～1333）の代になって政局も変わり政権は、源氏の一族である足利氏のものとなり、同時に、上杉氏が関東管領となった。上杉憲顯の代になって、畠山國清の建てた國清寺の寺名はそのままに、堂塔伽藍はまったく規模を改め寺を再興した、などの文書内容がある。これによっても往昔の國清寺の姿を知ることが出来る。

この金剛力士像は昭和50年に県重要文化財指定となった。毘沙門堂仁王門内に安置される金剛力士像は、口を開けた阿形、口を閉じた吽形の半裸形金剛力士である。

けん していじゅうようぶん か ざいこんごうりき し ぞう 県指定重要文化財金剛力士像



【 阿 形 】



【 吽 形 】

年毎に賑わう奈古谷毘沙門天の祭典

1月3日は、恒例の奈古谷毘沙門天の祭典が行われる。早朝祈禱に地域の人々が多く集まり参拝する。この日、境内で催される「開運だるま市」は、この祭典人気の中心とも言える行事になっている。

昔は、遠く海辺の人達も早朝歩いてこの毘沙門天に参拝していた。最近では、近隣市町村の人々も次第にこの祭典に足を運ぶようになり、かなりの賑わいをみせている。

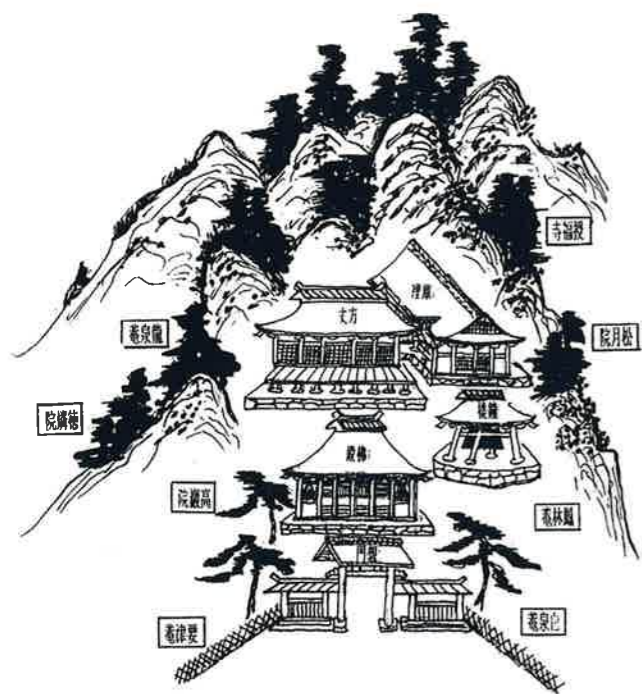
【参考資料】

- 蕨山町史・蕨山の史跡めぐりガイドブック・コミュニティカルテ「奈古谷」・毘沙門天略・縁起・下田
- 上原仏教美術館見学のしおり等

國清寺の貴重な繪圖面を見る

貞治年間、國清寺が隆盛をきわめた時代といわれ、全盛期には、子院78・末寺300を誇っていた。延徳3年(1491)、北条早雲が堀越御所を攻め落とした頃より國清寺は衰え始め、その後、鎌倉五山の一寺「瑞鹿山圓覚寺」末寺となった。

豆州田方郡奈古谷村國清寺并諸塔頭繪圖面(國清寺所蔵・寛政11年・1799)を見ると、想門・佛殿(現存)・鐘樓(現存)方丈(現存)・庫裡(現存)などの描写に加え、現存子院の高巖院・徳隣院・龍泉院・松月院・鳳林庵(跡地)・授福寺(野火烧失)・要津庵(廃寺)白泉庵(廃寺)などの位置関係が巧みに描かれ、200余年前の國清寺の姿やその近隣に点在した子院、そして、これを囲むかのような山並みの様子が見事に描かれている。この繪圖面もまた、往昔の國清寺の姿を知ることができる貴重な資料として今に残されている。



豆州田方郡奈古谷村國清寺并諸塔頭繪圖面

初代國清寺住職「無礙妙謙」和尚

無礙妙謙和尚は、武州比企郡人(現在の埼玉県比企郡)と言われる。上杉憲顯によって國清寺が修理増築された頃に中国へ渡り、天目山禪寺に修行する一方、多くの寺々をめぐる佛法の真髓を求め、その奥義をきわめた。帰国後、鎌倉5山中第3位の壽福寺住職や圓覚寺の住持となり、礼に篤いその人柄からにじみ出る徳を持って優れた人を育てるなど、卓越した手腕を寺院経営に発揮した、と言われている。

その後、上杉憲顯によって開山として國清寺に迎えられた妙謙和尚は、人材育成や伽藍の造営にも努力を続け、立派な禪学の道場を創りあげた。また妙謙和尚はその功績を自分だけのものにせず、隠退した翌年の春、國清寺を諸山に昇格させると共に、源叟和尚を國清寺の二世に推挙し、栄光ある寺格と共に管主の座に就かせるなど、数々の偉大な足跡を残している。

没後も、勅諡(勅命による法名)「佛眞禪師」や勅諡・佛眞禪師額(國清寺本堂正面に掲げられている後花園天皇直筆の額)などに見られる様に、その優れた人徳が今に伝わり広く人々に崇敬されている。この無礙妙謙和尚の霊は、國清寺開基・畠山國清・再開基・上杉憲顯たちの霊と共に、國清寺の裏山懐にそびえる椎の巨木に見守られ、静かに眠っている。



國清寺開山塔

畠山國清・上杉憲顯の墓所

國清寺本堂(國清寺并諸塔頭繪圖面の方丈)裏手に、開基塔と呼ばれる石垣で区画された場所がある。ここに五輪塔や、宝篋印塔の残欠がまつられている。この開基塔群が、畠山國清と上杉憲顯の墓所(國清寺)と伝えられている。



國清寺開基塔群

旧佛殿と中門の遺構

現存する佛殿の外周には、旧佛殿礎石の一部と犬走りや、雨落ち溝の石組み遺構などが残っている。さらに、佛殿より西に約30m程離れた場所には、径1.5m程の礎石5個が露頭していたが、その規則的配列から推定して、少なくとも、ここに柱間二間(約3.6m)の六脚以上の柱をもつ中門が存在したことが判る。

國清寺を訪ね、この佛殿付近の遺構や、中門の存在を示す礎石のことなどを「國清寺并諸塔頭繪圖面」に照らし合わせながら考えると、荘厳で、光輝く往昔の「天長山國清萬年禪寺」の壮麗なその姿が浮かんで来る。

緑深い、静かな奈古谷の山懐に建立されて630余年、厳しい風雪に耐え、幾多の災害に遭遇しながらも今にその変遷の姿を残し、多くの人々の心にその名が刻み込まれている國清寺は、今もなお、人々の深い信仰の場となり、時に、地域の大人や子供たちにとって清々しい憩いの場ともなっている。

大きな杉木立ちがそびえ立ち、樹齢数百年を思わせる様な老木が見られる境内の雰囲気は、夏の涼風、秋紅葉の彩りなど共に、四季を通じてここを訪ねる人々の心に残り、「天長山國清萬年禪寺」への崇敬の念を一層深めてくれる。

國清寺釈迦堂に祀る釈迦如来坐像

國清寺境内のほぼ中央に一棟のお堂がある。これが釈迦堂である。寛政11年の「國清寺所蔵繪圖面」では、ここが佛殿として描かれている。釈迦如来坐像は、このお堂の本尊で、桧材の割剥ぎ造り、漆箔、玉眼造りの像である。その全体の穏やかな作風や造法には、平安時代後期の仏像に伝わる古風さが見られるが、水晶を眼にはめ込む技法や、顔面部のはちきれる様な力強い表現には、鎌倉時代初期の仏師「運慶」の作にも近い趣が感じられ、慶派との関係を考慮すれば、その周辺の古参仏師あたりの作である可能性も考えられている。光背を装い蓮華座に安置されているこの釈迦如来坐像は、正に貴重な文化遺産と言えよう。

國清寺釈迦如来坐像の修理作業

東北芸術工科大学・牧野隆夫助教授（吉備文化財修復所）により、平成4年4月1日から平成5年10月15日までの約2年間にわたって國清寺釈迦如来坐像の修理作業が行われた。

釈迦如来坐像の修理は、江戸から明治時代にかけて3度ほど行われており、その際に、顔面から胴体にかけては顔料によって青く塗られ、像全体に後補の手が加えられていたため、全体のバランスも崩れていたにもかかわらず、造像当時の雰囲気充分残されていたことは、この仏像自体が優れた作品であったため、と言われる。

今回の修理ではこれらの事をふまえ、台座と光背の分解補強を含め、今後も信仰の対象として耐え得る形状を保つこと、文化財として長い時間保存してゆけることを基本方針とし、必要以上の手を加えない修理が行われた。



市指定文化財釈迦如来坐像

釈迦堂に祀る「弁財天」と徳川歴代将軍の位牌

弁財天は、弁天様として人々に親しまれ、音楽・弁財・財福などを司る神で、妙音天などとも言われ、吉祥天と共にインドで最も尊崇された女神で、福德賦与の神と称され七福神の一として信仰される。

釈迦堂に祀られる弁財天は、往昔の広い國清寺の境内にあつた大きな池の辺に祀られていたが、寛文11年（1671）に発生した大洪水「亥の満水」で流失し、何年かを経て國清寺に帰り、再び元の池の辺に安置されたと伝えられる。以来、幾星霜、風雪に耐え人々に深く信仰されて来た。

この弁天様も、平成5年10月・東北芸術



福德賦与の弁財天

工科大学・牧野隆夫助教授（吉備文化財修復所）による修復成って、現在、國清寺釈迦堂内左側に安置されている。また、この釈迦堂内右側には、徳川歴代将軍の位牌が祀られているが、これもまた貴重な文化遺産である。

毘沙門堂と金剛力士像

——県指定重要文化財——

奈古谷の國清寺から、南東へ山道を登ること約2km程の山中に、國清寺の鎮守「毘沙門天」を祀る毘沙門堂がある。

毘沙門天は、夜叉（財宝神、仏法護持の神）と羅刹（足疾鬼）を率いて北方世界を守護し、財宝を守ると言われている神で、七福人の一に数えられている。

一方、毘沙門堂と言えばこの地域の人々は、自然石百段程を並べた石段の途中で、毘沙門様を守る仁王さんの勇猛・威嚇の形相や、鎌倉初期の彫刻家「運慶」を思い浮かべる。

この毘沙門堂に祀られる毘沙門像は、慈覚大師（794～864）の作と伝えられている。慈覚大師は、圓仁と号し、唐に渡って修行し、帰国の際に船が難破、圓仁は、その船から逃れて伊豆に漂着し、山岳に靈地を求め、滝のある現在の付近に庵を結び、布教や仏



毘沙門堂

像の謹彫に精進した。毘沙門堂に祀られる毘沙門像もその一つとされている。

平安後期（1173）、文覚（平安末～鎌倉初期の僧侶）は、奈古谷の毘沙門に配流され、後に、頼朝に旗揚げの決意をさせたと伝えられている。

寿永のころ（1182～1185）、頼朝は文覚に命じ、伊豆の奈古谷に多聞堂を建てさせたが、このお堂が毘沙門堂のここのように、昔は、授福寺の鎮守であった。

この授福寺は、初め安養浄土院と言われていたが、一般には奈古谷寺と呼ばれ、文覚は、配流されてここに住んでいた。その後、文覚は頼朝に頼んでこの寺を修理し、授福寺と改めたようである。授福寺は近世になって野火により焼けたが、今なお仁王門が残っている。

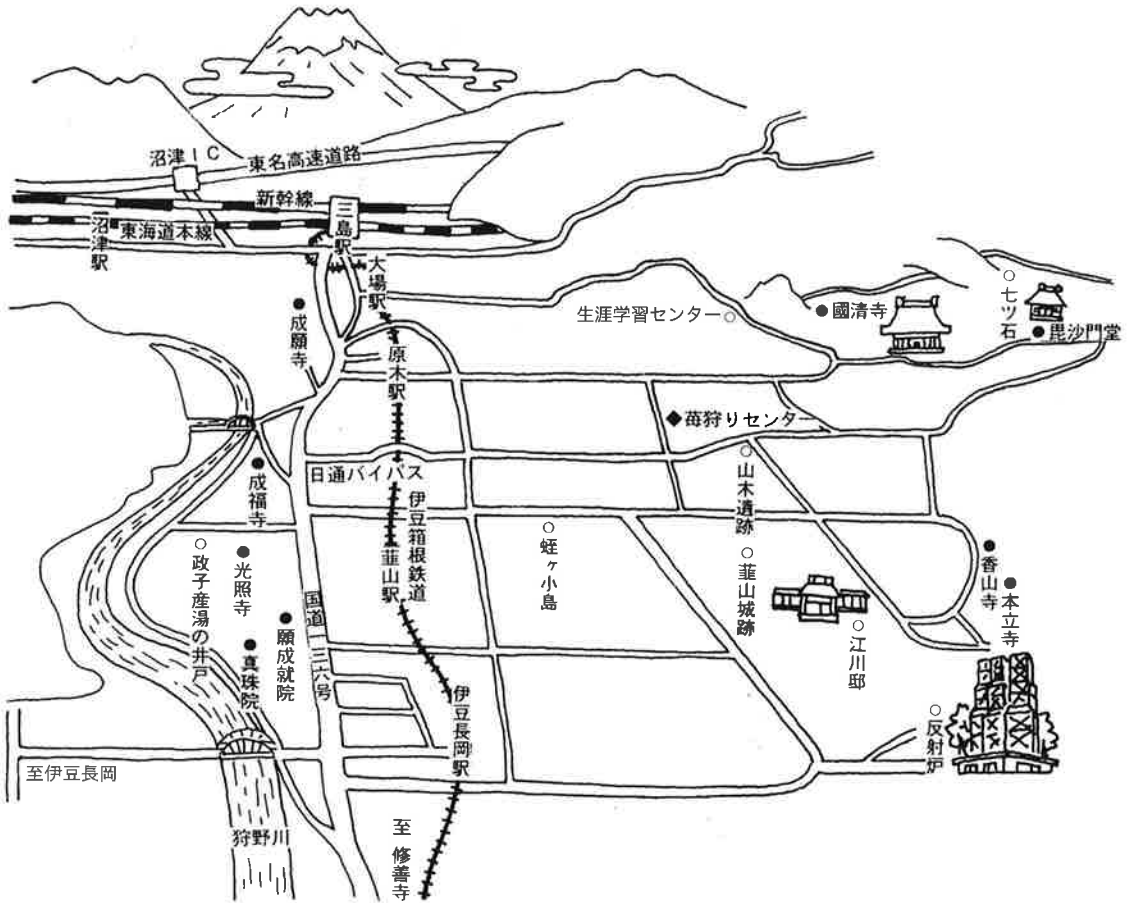
仁王門に安置される一対の仁王像は、文治2年（1186）頼朝が運慶や湛慶に命じて作らせたことが、昭和50年東京芸大解体修理で判明した。



毘沙門堂仁王門

葦山史跡めぐり

— 國清寺への案内略図 —



◆ 第1コース

J R 三島駅⇒伊豆箱根鉄道⇒原木駅下車⇒原木駅南通りを東へ直進⇒國清寺へ
徒歩約30分（三島駅からの所要時間約50分）

◆ 第2コース

J R 函南駅⇒東海バス 奈古谷行（発車時刻要確認）⇒奈古谷停留所下車⇒國清寺
へ徒歩約2分（函南駅からの所要時間約30分）

◆ 第3コース

東名高速道路⇒沼津IC⇒国道1号（三島市内）⇒国道136号（修善寺・下田方面）⇒原木駅南通りを東へ直進⇒國清寺へ（沼津ICから國清寺までの
自家用車所要時間約50分）